

過疎コミュニティにおけるリーダーシップと活性化活動

Leadership and Community Vitalization in Depopulated Areas

小林潔司*、多々納裕一**、宮地賢治***

Kiyoshi KOBAYASHI, Hirokazu TATANO and Kenji MIYACHI†

In rural communities, traditional human networks have functioned as major suppliers of collective services to local inhabitants. Due to the decreases in population of these communities, many communities are faced with the dissolving of traditional networks. Special-interest groups which are voluntarily arranged are expected to play roles in supplying a part of the collective services with which are used to be provided by traditional networks. This paper focuses on the roles these groups in revitalizing depopulated communities. This paper proposes an analytical scheme to investigate how a leader can activate voluntary contribution of followers. Given different regional environments, desirable norms for leaders to promote followerships are analyzed.

1. はじめに

過疎化の進展したコミュニティでは、人口の減少や高齢化の進展により旧来の集落を単位としたコミュニティ活動の維持が困難となってきている。このようなコミュニティは、祭祀、防災、除雪や水路の維持といった共同作業の中核をなしており、集落に居住する人々に多様な集合財を供給してきた。人口の減少や高齢化の進展によって、コミュニティが独自にこれらの機能を維持し、集合財の供給を継続していくことは困難になってきている。

近年、多くの過疎化コミュニティにおいて、「草の根」レベルの活性化活動が盛んになりつつある。すなわち、旧来の属地的なコミュニティとは異なり、コミュニティ横断的で機能的な社会集団が形成され、地域活

性化活動の核となっている。このような集団は、趣味の会から地域イベントの企画運営、産業育成に至るまで多種多様であるが、いずれの集団も人的ネットワークを再構成し、地域横断的なネットワークの形成に寄与していることは紛れもない事実である。地域横断的な人的ネットワークは、旧来のコミュニティの機能を補完し、地域住民の福祉の向上を促進するためのソフトなインフラストラクチャとなりうる。この意味で、地域活性化活動を担う集団が発展しうるようにその活動を支援していくことが求められる。

過疎地における活性化活動の命運は、活動の担い手であるリーダーやその支援者等の人的資源に依存するところが大きい。とりわけ、リーダーが有する資質や能力、活動主体の間に発達している人的ネットワークの質、活性化活動に必要な知識・技術の蓄積等が活性化活動の活動水準に大きな影響を及ぼすものと考えられる。リーダーシップと活性化活動の関連を分析

* 正員 鳥取大学教授 工学部社会開発システム工学科

** 正員 鳥取大学助教授 工学部社会開発システム工学科

*** 学生員 鳥取大学大学院 工学研究科

(〒680 鳥取市湖山町南4-110)

するためには、十分な科学的な分析枠組みを用意することが必要である。

以上の問題意識に基づいて、本研究では過疎地活性化活動におけるリーダーシップのあり方について規範的な分析を試みる。特に、活性化活動をとりまく環境と望ましいリーダーシップの関係について議論することとする。なお、リーダーシップ問題に関しては、検討すべき課題は多々あるが、本稿ではリーダーと他のメンバー（フォロワー）との間のリーダーシップ＝フォロワーシップ関係の分析に焦点を絞ることとする。

2. 本研究の基本的立場

(1) 従来の研究と本研究の立場

過疎地の活性化活動の事例やリーダーシップの現実について論じた文献は極めて多いが、その多くは活性化活動の経験を通じた個別的・定性的な記述にとどまっている。過疎地活性化活動におけるリーダーシップに対しては、心理学、社会学の分野で開発された方法概念、方法論は極めて有用であり、それらの適用研究は数多く存在する¹⁾。特に、リーダーシップ論に関しては、行政学、社会学等の分野において研究が蓄積されている。例えば、コミュニティ内部での政治力学とそこで求められるリーダーの資質の関係に関して理論的・実証的研究成果が蓄積されている²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾。また、農村社会学の分野では、コミュニティ運動の活性化に果たすリーダーの役割が詳細に検討され⁶⁾⁷⁾、コミュニティ外部との情報、資源のチャンネル機能として果たすリーダーの役割が重要視されている⁸⁾⁹⁾。

さらに、過疎地活性化活動を把握する理論仮説として種々のものが提案されてきている。Parsons の AGIL 論¹⁰⁾を適用した事例¹⁾、Merton の準拠集団論¹¹⁾を適用した事例⁶⁾⁹⁾等、社会学理論を用いた研究事例は数多い。これに対して、本研究ではマイクロ経済学的アプローチを試みる。筆者らの知る限り、このような観点から過疎地活性化活動にアプローチした研究事例は見あたらない。現実の過疎地域で展開する活性化活動は、たまたま地域に存在するリーダーの特質や活動員の資質、地域環境という個別的・偶然的要因に左右される。いわば、過疎地研究は「顔の見える」議論を絶えず行っており、経済学的アプローチはともすれば対象を過度に簡略化するという誤りを犯しかねないという印象がつきまとう。しかし、活性化活動

におけるリーダーシップに関するマイクロ経済学的分析の効用は、リーダー・フォロワーの行動やその相互作用をある規範的な合理性を通じて理解しようとする点にある。このことは、現実の活性化活動の多様性を最大限に尊重しつつも、その現実の背後にある regional dynamics を理解しようとする科学的姿勢である。筆者らが実施している過疎地活性化活動のリーダーシップに関する研究は、上述の問題意識に根ざした規範的分析と現実の regional dynamism を対象とした実証的分析により構成される。本論文では、以上の研究の中から規範的分析結果について報告する。もとよりリーダーシップに関する規範的研究自体、非常に大きな研究課題である。本論文は、本研究の第1報であり、特に活動環境とリーダーシップの関係の分析に焦点を絞ることとする。

(2) 地域活性化活動の意義

高度経済成長期以降、過疎・過密の問題は国土計画上の課題として広く認識されてきている。地域からの人口の流出は、地域住民の生活の基盤の維持を困難にした。若年層人口の減少は、同時に、高齢化の進展を招き種々の問題が発生してきている。

農山村地域では、従来、地縁的なつながりを基盤とする強固なコミュニティが形成されていた。このようなコミュニティは、道路や水路の維持、農作業等にみられる相互扶助的な労働提供、祭等の集落の行事や消防団等の防災活動といった集落の生活で集散的に消費されるサービス（集合財）を主体的に供給してきた。このことから、従来のコミュニティが集合財を供給するソフトなインフラストラクチャとして機能していたことがわかる。

過疎化の進行に伴い、このような既存のコミュニティは崩壊の危機に瀕している。コミュニティの崩壊は、コミュニティによる集合財の主体的供給が困難になることを意味している。従前の集合財の供給水準を維持しようとするれば、コミュニティの構成員個々の負担を増すか、行政による対応を期待することになる。しかしながら、過疎化と同時に進行している高齢化により、各人の負担の増加は難しいのが現状である。また、従来のコミュニティが提供していた多様なサービスを行政の対応に望むことも現実的には困難である。

Merton の準拠集団論を適用し、「主体的行動体系< >客体的行動体系」と「普遍的価値意識< > 特殊の価値

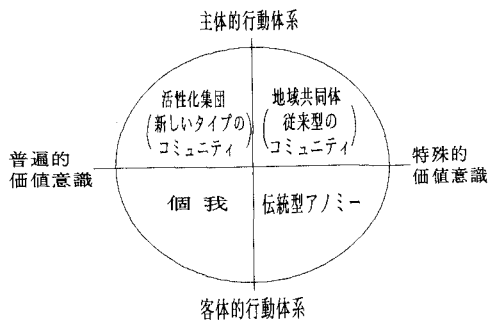


図-1 地域社会集団の類型

価値意識」を整理の軸として、過疎地域における社会集団を分類しよう。「主体的行動体系」対「客体的行動体系」は、地域社会に対する関わりかたの姿勢を示している。主体的行動体系を有する社会集団とは、社会集団が自ら、自らの望む環境の創出に取り組む集団である。これに対し、客体的行動体系を有する集団とは、自らの環境の改善に対して、行政等集団外部の営みに期待する集団である。一方、「普遍的価値意識」対「特殊的価値意識」は、住民の価値が特定のコミュニティに向けられるか、他のコミュニティと交流し、連帯しうる普遍的な価値を共有することに向けられるかという意識の違いを表す。「特殊的価値意識」を有する社会集団は、属地的な帰属集団に関心を向けるのに対し、「普遍的価値意識」を有する社会集団は、非属地的でコミュニティ横断的な事柄に関心を向ける点に違いがある。

図-1は、奥田による図式²⁾に若干の修正を加え、過疎地域における社会集団の分類を試みたものである。第1象限の「地域共同体」は、上述の属地的なコミュニティに対応する。「地域共同体」は、種々の集合財を自らの手によって主体的に供給するが、その供給の対象は属地的な集落の構成員に限られている。過疎化の進行にともなって、「地域共同体」の主体的な行動様式の確保が困難になる。このような状況下では、共同体内の連帯意識が薄れ、共同体内で主体的に集合財を供給することに関心を持たない層が多くなる。このような段階にある社会集団は「伝統型アノミー」と呼ばれる。過疎地域のコミュニティの多くはこのような類型に属するものと考えられる。第4象限の「活性化集団」は集合財をその構成員に対して主体的に提供する社会集団である。さらに、その構成はコミュニティ

横断的であり、普遍的な価値体系を有した新しいタイプの社会集団である。

近年、村おこし運動等に見られる地域活性化活動が盛んになってきた。これらの活動は、従来の「地域共同体」的なコミュニティとは異なり、集落横断的であり主体的な参加を原則とするボランティアな社会集団である。このような集団の活動は、それをとりまく社会経済的環境や活動の熟度・目的・規模等によって多様に異なっている。しかしながら、これらの活動が過疎化によって失われた人的ネットワークの再構成に資することは、紛れもない事実であろう。これらの集団の活動は、従来の地縁的なコミュニティ活動を代替・補完する人的ネットワークの整備につながるものであり、従来地縁的なネットワークに基づくコミュニティによって提供されていた集合的サービスの供給を補いうる可能性を秘めている。このように、過疎地振興の方策としての活性化活動の推進はソフトなインフラストラクチャである人的ネットワークの充実寄予する。地域活性化活動は過疎地域の振興にとって極めて重要な役割を果たすことが期待される。

3. 地域活性化活動とリーダーシップ

(1) 地域活性化活動の諸段階

本研究では、自発的な意志によって活動に参加するフォロワーと活動を運営するリーダーからなる活性化活動集団を分析の対象とする。このような活性化活動が形成されるためには、リーダーはフォロワーに対して活動に参加する誘因を与え続けねばならない。活性化活動は構成員に集合財を提供する。集合財の提供が行われ、各構成員にその利益が還元されなければ、活動に参加する誘因は生じない。Olson¹²⁾は、社会集団を形成・維持していくためには各構成員に対する個別的な利益の存在が不可欠であることを示し、大規模集団に対して小規模集団の方が効率的に集合財の供給をなせると論述している。構成員に対する個別的な誘因が全く存在しない場合には、合理的で利己的な個人は集団の成果に「ただり」することが可能である。「ただり」を許せば、集団による集合財の供給は非効率なものとならざるをえないだろう。したがって、このような集団を運営していくため、リーダーにはフォロワーに適切な個別的誘因を与えつつ、集合財の供給を効率的に行うことが求められる。

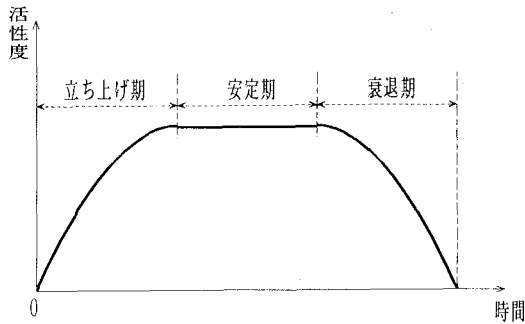


図-2 地域活性化活動の推移

望ましいリーダーシップのあり方は、活性化活動を取りまく社会的・経済的環境、活動の熟度・目的・規模によって多様に異なってくる。図-2に活性化活動の推移を模式的に示す。活性化活動の立ちあげ期には、フォロワーを獲得し活動の充実を図ることが必要である。このためには、活性化活動に参加しているフォロワーには、集合財の供給による活動の利益の配分を行うとともに、各人の積極的参加を促す誘因を与えることが必要であろうし、外部からの参入を促進するために外部者に参加の誘因を与えるような活動運営が必要となる。立ちあげ期を経過すると、集団の構成人数も増加し安定してくる。このような安定期には、新規の参入の促進よりもむしろ、活動に参加しているフォロワーの積極的参加を促し、効率的な集合財の供給を図ることが必要となろう。集団の規模が大規模となれば、積極的参加の誘因を各人に与えることは難しくなる。このような場合には、組織構造を階層的に編成し、個別の小規模集団内で各構成員に誘因を与えるような工夫も必要となろう。安定期を過ぎれば、活動は衰退する。衰退期を迎えることは、組織としては望ましいことではないが、集団内で供給される集合財の価値の相対的低下や構成員の参加への誘因の低下が生じれば、このことは避けえない。このため、衰退を未然に防ぐためには集団内で供給される集合財の質を絶えず向上させ、陳腐化を防ぐことが重要である。このためには、新たなリーダーの育成・交代、組織の改編等の施策を先行的に講じておく必要がある。このような総合的な施策の実施によって、組織の継続的發展を図ることができると考えられる。

このように活動の熟度・目的・規模が異なれば、要請されるリーダーシップの内容は多様に異なるものと

考えられる。従って、これら全般を見渡したリーダーシップが必要である。本研究では、このための第1歩として、1人のリーダーとフォロワーから構成され、過疎地活性化を目的として活動を営んでいる小規模集団を取り上げる。また、活性化活動がある程度軌道にのり、ある固定的な構成メンバーで活動を運営しているような集団を対象とする。本研究で定式化を試みるリーダーシップ問題は、今後より複雑なリーダーシップ問題を分析するためのプロトタイプモデルとなるものである。例えば、活動の規模が大きくなれば、複数のリーダーやリーダー間での階層性が必要となる。また、リーダーの後継者を養成する段階、リーダーの交代期等では、メンバーの入会・脱退行動が重要となろう。このようにプロトタイプモデルを拡張することにより、より多様なリーダーシップ問題にアプローチすることが可能となる。

(2) リーダーシップ=フォロワーシップ問題

リーダーシップをリーダーが自分の役割を遂行するための規範とリーダーの努力配分の様式として定義する。リーダーはグループ全体を統括し活動成果の向上に努めると同時にフォロワーとの日常的な接触やフォロワーが行った貢献の積極的評価を通じてフォロワーに情緒的・心理的な満足感を与えるように努力する。リーダーが自己の努力配分を決定する際に準拠する規範をリーダーシップ規範と呼ぶ。フォロワーはリーダーの努力配分様式を常に観察しており、リーダーがフォロワー達に協力を依頼したり議論をとりまとめる際に見せる基本的な姿勢を通じてリーダーシップ規範を知ることができる。現実には、リーダーがリーダーシップ規範を意識的に決定せず、日々の活動や人間関係の中でリーダーシップ規範が適応的に決定される場合も多い。しかし、リーダーシップ規範が場当たりに変更されるような場合、活性化活動が参画者に理解され、社会活動として定着することは困難である。

一方、フォロワーシップ (followership) とは、フォロワーとして期待される行動様式を意味している。フォロワーは活動に参加し、集団活動の成果を享受する。集団活動の成果を享受するためには、集団活動に対して応分の努力を払うことが期待される。しかし、フォロワーは集団への加入が強制されていない。フォロワーは集団からの脱退が自由であり、その潜在的可能性を有しながら活動に参加している。この場合、フォロ

ワーには集団成果に「ただのり (free ride)」しようとする誘因が働くことを否定できない。本研究では、フォロワーが「ただのり」をやめ自分が享受する便益に見合った努力を自発的に行うような行動様式をフォロワーシップと呼ぶこととする。リーダーは集団成果を向上させフォロワーの集団活動への参加インセンティブを賦与すると同時に、フォロワーとの人間的接触を通じてフォロワーシップを誘発するように努力する。活性化活動が地域に定着するためには、優れたリーダーが望ましいリーダーシップを発揮するとともに、フォロワーがフォロワーシップを発揮することが不可欠である。本研究ではリーダーシップ=フォロワーシップ問題を規範的に分析することにより、リーダーシップがフォロワーシップや集団成果に及ぼす影響や、集団をとりまく環境がリーダーシップ=フォロワーシップ関係に及ぼす影響について分析する。

4. モデルの定式化

(1) フォロワーシップの定式化

フォロワーは、1) 集団活動に積極的に貢献する、2) 活動に「ただのり」という選択肢がある。フォロワーは、集団活動に参画することにより、集団活動がもたらす経済的便益の配分(物的効用)と精神的な満足(情緒的効用)を獲得する。フォロワーの物的効用は、集団の成果 $y (> 0)$ 、自分の努力水準 $e (> 0)$ 、自己の貢献度 $\Delta y (> 0)$ により構成される。ここに、集団成果 y は与件として与える。情緒的効用は、献身したことによる満足度 g と怠けたことに対する罪の意識 q より構成される。

フォロワーが集団活動に積極的に貢献する場合の効用 U_D を物的効用 U_D^m と情緒的効用 U_D^e の加法和

$$U_D = U_D^m + U_D^e = y - e + g \quad (1)$$

として表現する。ここに、 $y - e$ は物的効用であり集団成果 y から努力水準 e をさし引くことにより定義される。また、 g は情緒的効用であり集団活動に貢献したことによる満足水準を表わす。一方、フォロワーが「ただのり」する場合、物的効用 U_F^m として自分が怠けた場合の集団成果 $y - \Delta y$ を得る。情緒的効用 U_F^e として、怠けたことによる精神的な罪の意識 $-q$ を考慮する。この時、ただのりする場合の効用 U_F を次式のように表現する。

$$U_F = U_F^m + U_F^e = y - \Delta y - q \quad (2)$$

リーダーは、啓蒙、説得努力 $\theta (\geq 0)$ によりフォロワーの罪の意識と満足度を向上させ、フォロワーの情緒的効用に影響を及ぼす。いま、リーダーが説得努力を行わない時 ($\theta = 0$)、フォロワーが感じる平均的な満足度と罪の意識の水準を $\bar{\alpha}$ 、 $\bar{\beta}$ と表わす。フォロワーが感じる満足度と罪の意識の水準はその時々心理的条件によって多様に変化する。このように心理的条件で変動する満足度、罪の意識を確率変数 ε_1 、 ε_2 で表現すれば、満足度 g と罪の意識 q はそれぞれ次式のように定式化できる。

$$g = \bar{\alpha} + \theta^{\gamma_D} + \varepsilon_1, \quad q = \bar{\beta} + \theta^{\gamma_F} - \varepsilon_2 \quad (3)$$

フォロワーが集団活動に積極的に取り組むことを決定するためには、貢献した場合の効用が「ただのり」した時の効用よりも大きくなければならない。いま、確率変数 ε_1 、 ε_2 がワイブル分布に従うと仮定する。この時、フォロワーが「ただのり」する確率 P は、2項ロジットモデルにより

$$P = \frac{1}{1 + \exp\{\lambda(\Delta y - e + \bar{s} + \sigma)\}} \quad (4)$$

と定式化することができる。ここに、 λ^{-1} はワイブル分布の分散の程度をあらわすパラメータである。また、 $\sigma = \theta^{\gamma_D} + \theta^{\gamma_F}$ 、 $\bar{s} = \bar{\alpha} + \bar{\beta}$ はフォロワーの活動に対する積極性を表わすパラメータであり、この値が大きくなるほどフォロワーは集団活動に自発的に貢献する性向を持つことになる。

(2) リーダーシップ規範の定式化

リーダーは集団行動の活性化を図るためフォロワーの集団活動への貢献を促進しようとする。前述したように、リーダーの意志決定変数は1) リーダシップの規範、2) 資源(時間・能力)の投入努力 θ である。リーダーシップの規範として、以下の5種類を考えよう。すなわち、1) 集団活動による成果の増大を考慮する成果主義 (L_1)、2) 成果だけでなく、フォロワーの努力水準も考慮する洗練された成果主義 (L_2)、3) フォロワーの期待効用の最大化を図る功利主義 (L_3)、4) フォロワーの努力水準の増大を目的とする精神主義 (L_4)、5) フォロワーの情緒的効用の増大を重要視する情緒主義 (L_5) である。以上の5種類のリーダーシップ規範はそれぞれ以下のように定式化できる。

$$L_1 = \{1 - P(\theta)\}y + P(\theta)(y - \Delta y) - C\theta$$

$$L_2 = \{1 - P(\theta)\}U_D^m(\theta) + P(\theta)U_F^m(\theta) - C\theta$$

$$L_3 = \{1 - P(\theta)\}\bar{U}_D(\theta) + P(\theta)\bar{U}_F(\theta) - C\theta$$

$$L_4 = \{1 - P(\theta)\}e - C\theta$$

$$L_5 = \{1 - P(\theta)\} \bar{U}_D^e(\theta) + P(\theta) \bar{U}_F^e(\theta) - C\theta \quad (5)$$

ただし、 $P(\theta)$: フォロワーが「ただのり」する確率(式(4)参照)、 C : フォロワーの説得にあたって必要となるリーダーの限界の費用であり、リーダーのカリスマ性が大きくなれば C は減少する。また、 $\bar{U}_D(\theta) = y - e + \bar{\alpha} + \theta^{\gamma_D}$, $\bar{U}_F(\theta) = y - \Delta y - \bar{\beta} - \theta^{\gamma_F}$, $\bar{U}_D^e(\theta) = \bar{\alpha} + \theta^{\gamma_D}$, $\bar{U}_F^e(\theta) = -\bar{\beta} - \theta^{\gamma_F}$ である。

(3) リーダーの行動モデル

リーダーの意志決定問題は、1) リーダーシップの規範の選択(問題1)と、2) 選択した規範のもとでの努力配分様式を決定する問題(問題2)として定式化できる。問題2は所与の規範のもとで、各目的関数 $L_i(\theta)$ ($i = 1, \dots, 5$) を最大にするような努力配分を求める問題として定式化できる。最適な努力配分パターンは $\theta \partial L_i(\theta) / \partial \theta = 0$, $\theta \geq 0$, $\partial L_i(\theta) / \partial \theta \leq 0$ を満足するような θ^* によって与えられる。

以上の定式化では、他のフォロワーの行動を与件としてある1人のフォロワーとリーダーとの関係のみに着目した。フォロワー全体の行動は最終的には集団成果に影響を及ぼし、その結果は個人行動に再び影響を与える。集団成果と個人行動の関係は、本モデルを時間軸上に展開していくことにより記述できる。このようなモデルの動学化は次の機会に発表したい。

(4) リーダーシップ規範と集団成果

第三者的な立場からリーダーシップ規範が活動の成果に及ぼす影響について分析しよう。活性化活動が過疎地振興に資するためには、少なくとも活性化活動に参加することの意義が大きくなければならない。リーダーシップ規範は、フォロワーの活動への貢献を誘因づけるとともに、フォロワーの効用増大に貢献することが不可欠である。このような観点から、リーダーシップ規範-集団成果を評価する視点として、(1) フォロワーが活動に献身する確率 $1 - P(\theta)$ 、(2) フォロワーのログサム効用(合成効用) $\bar{U} = \lambda^{-1} \log\{\exp(\lambda \bar{U}_D(\theta)) + \exp(\lambda \bar{U}_F(\theta))\}$ を採用しよう。リーダーシップ規範の評価の視点として合成効用指標を用いた場合、直観的にはリーダーシップ規範としてフォロワーの期待効用の最大化を図る功利主義(L_3)が望ましいと考えることができる。フォロワーの数が非常に多くなり合理的な活動運営を行える状況では、功利主義的規範を採用することによりフォロワーの合成効用を最大化することができよう。また、5. で示

すように功利主義的リーダーシップは献身確率を増加させるためにも極めて有効な規範である。過疎地活性化活動では集団構成員が少人数であったり、良好ではない環境の下で活動を行なう場合が少なくない。この場合、常に功利主義が望ましいリーダーシップ規範になるとは限らず、他のリーダーシップ規範が結果としてフォロワーの効用を最大化する場合が出現する。功利主義的規範は通常の社会的組織運営において非常に魅力的なリーダーシップ規範ではあるが、過疎地活性化活動の場合には必ずしも該当しない場合がある。換言すれば、そこに過疎地活性化活動を運営することの難しさがある。

5. 思考実験による分析

(1) 思考実験の目的

過疎地の活性化活動が置かれている環境は極めて多岐にわたる。限られた人材と知識の下で偶然的な要素によりリーダーが選ばれ、偶然的な経緯が契機となり活動が始まった場合が少なくない。したがって、活性化活動が必ずしも合理的な手続きで組織化された訳ではない。リーダーシップが非常に個人的であったり、活性化活動をとりまく環境がむしろ特殊・極端である場合が少なくない。このような特殊な環境の下では功利主義的規範が常に最善とはなりえず、むしろ常識的な経営感覚では次善的(異端的とも思える)リーダーシップが効を奏すこともあり得よう。本節では、功利主義的規範と代替的な規範が選択されうる環境を措定することを試みよう。

リーダーシップ=フォロワーシップ関係を規定するパラメータ群は、1) リーダーの資質(リーダーのカリスマ性 C)、2) フォロワーの特性(個人的貢献度 Δy 、情緒的感応度 γ ($\gamma = \gamma_D = \gamma_F$ と仮定する)、活動に対する積極性 \bar{s} 、情緒的な安定性 λ)、3) 活動の収益性(集団成果 y 、努力水準 e) に大別できる。これらパラメータの変化が集団成果の評価指標(献身確率 $1 - P$ 、フォロワーの期待効用 \bar{U}) に及ぼす影響について数値実験により考察する。

具体的には、上述した各種パラメータの組み合わせを網羅的に設定し、献身確率 $1 - P$ 、合成効用 \bar{U} を最大にするようなリーダーシップ規範を求めた。その結果、多くのケースにおいて功利主義的リーダーシップ(L_3)が献身確率、合成効用を最大にする望ましい規範

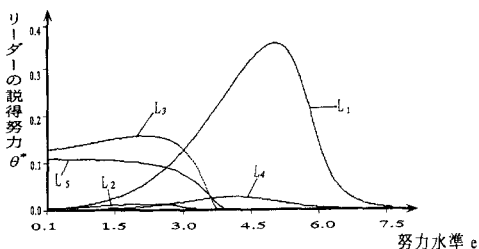


図-3 フォロワーに必要な努力の水準 e とリーダーの説得努力の水準 θ^* ($C = 1.5$ の場合)

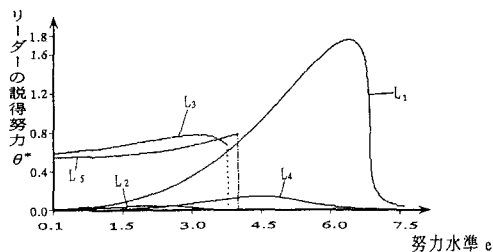


図-6 フォロワーに必要な努力水準 e とリーダーの説得努力の水準 θ^* ($C = 0.7$ の場合)

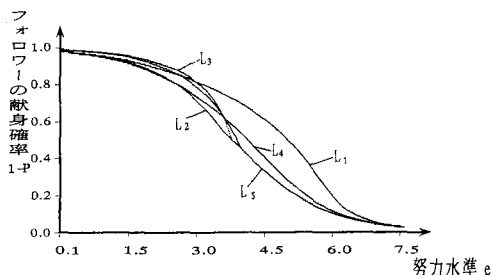


図-4 フォロワーに必要な努力の水準 e と献身確率 $1-P$ ($C = 1.5$ の場合)

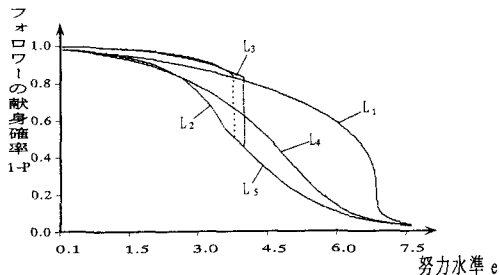


図-7 フォロワーに必要な努力の水準 e と献身確率 $1-P$ ($C = 0.7$ の場合)

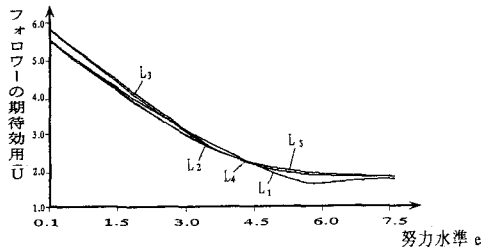


図-5 フォロワーに必要な努力の水準 e と合成効用 \bar{U} ($C = 1.5$ の場合)

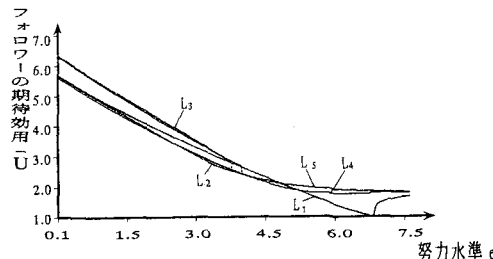


図-8 フォロワーに必要な努力の水準 e と合成効用 \bar{U} ($C = 0.7$ の場合)

であり、洗練された成果主義 (L_2)、精神主義 (L_4) が望ましくない結果を与えることが判明した。しかし、功利主義的リーダーシップ (L_3) 以外の規範 (成果主義 (L_1)、情緒主義 (L_4)) が望ましい結果を与えるケースも存在する。一例として、図-3~図-5はパラメータを $\lambda = 1, y = 5.46, \Delta y = 3.6, \bar{s} = 0.2, \gamma = 0.5, C = 1.5$ に設定したケースにおける努力水準 e と各リーダーシップ規範の下でのリーダーの説得努力の水準 θ^* 、献身確率 ($1-P$)、の関係を示している。本ケースは全ケースの中ではリーダーのカリスマ性が相対的に低くフォロワーの情緒的感応度が比較的低い場合を想定している。図-4、図-5より、 e が

大きくなるにつれて功利主義 (L_3) に代わり成果主義 (L_1) が望ましいリーダーシップ規範となっている。また、情緒主義 (L_4) も貢献確率が大きく、魅力的なリーダーシップ規範となっている。一方、洗練された成果主義 (L_2) は、一見して、成果主義 (L_1)、功利主義 (L_3) の折衷的なリーダーシップ規範として魅力的に思えるが、両規範の場合よりもリーダーの努力配分は少なくなり結果としてフォロワーの貢献確率は低くなる。さらに、フォロワーに必要なとされる努力の水準が大きような環境では、献身確率は極めて低くなる。このような環境では、むしろ成果主義 (L_1) のように集団活動の目的を先鋭化させたリーダーシップ規範のほうが献

身確率を高めるといふ結果が得られている。合成効用に関しても、成果主義 (L_1) が最も望ましい規範となる区間が現れている。図-6~図-8は、上述のケースに対して、リーダーのカリスマ性が高い ($C = 0.7$) の場合の結果を示している。リーダーのカリスマ性が高く、フォロワーに必要とされる努力の水準が低い場合には、功利主義 (L_3)、情緒主義 (L_5) が望ましい結果を与えている。しかしながら、フォロワーに必要とされる努力の水準が大きいような環境では、成果主義 (L_1) が最も望ましい規範となる区間が現れる。図-5と図-8とを比較すれば、リーダーのカリスマ性の増加とともに功利主義が最も望ましいとされる環境が拡大していることがわかる。以上の結果は、分析結果のごく一部を示したにすぎないが、活動が定常的な段階にある小規模集団では、多くのケースにおいて功利主義的リーダーシップが望ましい結果を与えることが観察された。ただし、必要とされる努力水準 e が大きい場合やリーダーのカリスマ性が低い場合には、成果主義、情緒主義的リーダーシップが望ましい結果を及ぼしうることも見いだせた。

6. おわりに

過疎地活性化の現場では、具体的な行動指針を要求している。直観的・経験的な行動指針もそれが極めて有用である場合が多いことは論を待たない。一方で、望ましいリーダーシップに関する理論的な分析を行なうことは、現実の地域活性化の実践に対して有用な情報を提供すると同時に、現実の regional dynamism に関与せざるを得ない過疎地活性化に携わる研究者にとって1つの理論的根拠を与えうる。無論、科学的分析による知見の真価は具体的な過疎地活性化活動における実践を通じて検証する他はないだろう。なお、過疎地活性化の現場では、多様な局面において具体的な行動指針が要求されており、今後本研究の分析枠組みを拡大・充実していくと同時に、1) 集団メンバーの持続、2) サブ-リーダーの組織化、3) リーダー交代期における熱意の継承等、数多くの課題に取り組んでいく必要がある。なお、本研究における問題意識の多くは山間過疎地若手リーダー養成講座の運営とそこにおける議論を通じて培ったものである。講座運営にあたって尽力頂いた奥山育英教授(鳥大)、岡田憲夫教授(京大)、その他講師陣、Hibbard 教授(Oregon

大)、Stucki 教授(Zürich工科大)等の外国人講師陣、講座に参加した研修員各位に感謝の意を表したい。

参考文献

- 1) たとえば、岡田憲夫、小林潔司：外部者の参入が山村過疎地域に活性化効果に関する研究、土木計画学研究・講演集、No.13, pp.161-168, 1990.
- 2) 奥田道大：都市コミュニティの理論、東京大学出版会, 1983.
- 3) 大石紘一郎：町と村のリーダーたち、朔北社, 1993.
- 4) 萬田久義：村落社会体系論、ミネルバ書房, 1987.
- 5) Israel G.D. and Beaulieu, L. J.: Community Leadership, in Luloff A.E. and Swanson L.E. (eds.) American Rural Communities, Westview Press, pp.181-202, 1990.
- 6) O'Brien D. J., Hassinger, E.W., Brown, R.B., and Pinkerton, J.R.: The social networks of leaders in more and less viable rural communities, Rural Sociology 56(4) pp.699-716, 1991.
- 7) Ayres, J. S. and Potter H. R.: Attitudes toward community change: A comparison between rural leaders and residents, Journal of the Community Development Society of America, 20(1), 1989.
- 8) McFfranahan, D. A.: Local growth and the outside contacts of influentials: An alternative test of the growth machine hypothesis, Rural Sociology 49(4), pp. 530-540, 1984.
- 9) O'Brien, D. J. and Hassinger, E. W.: Community attachment among leaders in five rural communities, Rural Sociology 57(4) pp. 521-534, 1992.
- 10) Parsons, T.: Social Systems and the Evolution of Action Theory, The Free Press, 1977、田野崎昭夫監訳：社会体系と行為理論の展開、誠信書房, 1992.
- 11) Merton, R.K.: Social Theory and Social Structure, The Free Press, 1949、森東吾他訳：社会学理論と社会構造、みすず書房, 1961.
- 12) Olson, M.: The Logic of Collective Action, Harvard University Press, 1965、依田博他訳：集合行為論、ミネルヴァ書房, 1983.